

「われわれ」の行方

『マルモール』読解

工藤 晋

1. 『マルモール』の構成と語り手の問題

1965年、パリからマルティニク島に帰還したエドゥアール・グリッサンはマルティニク社会の経済、文化的停滞状況を目の当たりにした。1975年に発表された彼の3番目の小説、『マルモール』¹にはそうした故郷での経験が反映しており、以前の作品とは相貌を大きく異にしている。それはまず、第2次世界大戦直後の急進的な若者グループの行動を描いた寓話的な『レザルド川』（1958年）、歴史語りを問題とした神話的な『第四世紀』（1964年）に比して、本作がマルティニク社会の「民衆」、すなわち植民地から海外県に至る歴史のなかで一貫して抑圧されてきた黒人系住民の現実を正面から扱ったという点にある²。表題の *malemort* とは「事故や殺人などによって突然訪れる死」といった意味だが、それは彼らの日常の生のありようを指し示している。マイケル・ダッシュの言葉を借りれば、本作には前2作に見られた「世界に対する詩的抱擁」といった高揚感がなく、「マルティニクの社会経済の変遷に直面した自己懷疑とペシシズム」に満ちている³。さらに構成面でも新機軸が打ち出される。本作は前2作と舞台設定と登場人物の関連を保ちながらも、前2作のように一貫した物語の持続的展開をみせない。読者に差し出されるのは有名無名の夥しい登場人物によって織り成される短い物語群、過去の叙事詩的想起、カリブ海世界の展望、詩的モノローグ、インタビューの引用、年表といった断片的テキストの集合体であり、それらが線条的に提示されることなく1788年から1974年に渡る年号を付された13の章のなかに散在、というより散乱している。また、小説言語に関しては句読点の排除や統辞上の破格や文の断片化といった詩的言語の特徴が随所に見られ、記述内容の把握は往々にして困難を極める⁴。

そのようなカオス的に錯綜としたテキスト群を貫いて、マルティニクの民衆のリアリティを見つめ、語る視点が設定されている。それは前2作には見られなかった「われわれ」という語り手である。小説内で「われわれ」はさまざまな登場人物との相関を示す。本論は「われわれ」が語るいくつかの物語を辿りながら『マルモール』と前2作との距離を測定し、「われわれ」の位置、ディスクールの他者性、語る主体への自覚といった問題に焦点を合わせ、本作を通じて示唆されるグリッサン詩学の進展について考察してみたい。

ではまず『マルモール』の13章⁵を概観しつつ、時間的に散らばった物語群のなかで語りの地平がどのように設定されているかを考えてみよう。

1. Tontine (1940) 「トンティン小屋」：一人の死者をモルヌ（山間部）から運び降ろす棺担ぎの一行に加わるドゥラン。

2. Billons (1941) 「銅貨」：コレントロックの庭で暴れる豚を取り押さえるドゥラン、

¹ テキストは *Malemort*, Gallimard, 1997 を使用した。以下 *MM* と略記する。

² ベルナベ、シャモワゾー、コンフィアンらはグリッサンの諸作品のなかでとりわけ本作を「アンティルの現実」を提示したエポック・メイキングな作品として注目している。Jean Bernabé, Patrick Chamoiseau, Raphaël Confiant, *Éloge de la créolité*, [1989], Gallimard, 1993, p.23.

³ J. Michael Dash, *Edouard Glissant*, NY, Cambridge University Press, 1995, p.117.

⁴ カイエはこうした言語的特徴を示す『マルモール』を「ノン・ジャンル」*« hors-genre »* と評している。Bernadette Cailler, *Conquérant de la nuit nue : Edouard Glissant et l'Histoire antillaise*, Tübingen, Gunter Narr Verlag, coll. Etudes littéraires française n° 45, 1988, p.108.

⁵ 各章のタイトルは *MM*, p.239 による。番号は引用者が付したもの。

メドリュス、シラシエ。3人による日銭稼ぎの仕事についての軽妙な会話。ドゥランはコレントロックの息子セレストンに神秘的な説教をする。

3. Saline (1936/ - 1943) 「塩田」: 1936年ごろ妻を主人のベケ(支配層に属する白人)に陵辱され、そのベケを殺そうとして失敗し逃亡したポータンにまつわる物語。1943年にシラシエとメドリュスはそのポータンを探しに南部の塩田地帯に出かけるが見つけれなかった。ポータンは結局偶然憲兵に殺される。またナインフォルという市長選候補が何者かによって射殺されたことが語られる。

4. Pays (1788) (1939) 「クニ」: 『第四世紀』で描かれた「最初の」逃亡奴隷ロングエがマルティニクに上陸した1788年の回想。そして1939年、近代植民地の荒廃の描写。ドゥラン、メドリュス、シラシエの登場。シラシエは兵役志願を表明する。

5. L'urne (1945 - 1946) 「投票箱」: 酒場でドミノ打ちに興ずるレスプリら4人。レスプリはトロワ・リヴィエールの歴代市長選挙にまつわるさまざまないさめを語り、シラシエが片隅で耳を傾ける。

6. Sept minutes et demie (1945) 「7分半」: 兵舎から無断借用した上官のシトロエンでカルバシエ広場へ向けて島の高速道路を疾走するシラシエのモノローグ。

7. Tombé lévé (1788 - 1794) 「倒れ、立ち上がり」: マルティニクの歴史の詩的回顧。7つの異なった時代に属するエピソードから成り、そのいずれも3人の無名の黒人が体制側に殺されるという内容。

8. Braises (1938/1958) 「燐火たち」: パン焼き職人からトロワ・リヴィエールの市長になったオトゥンヌの妻が、1938年に自分の地所に財宝が眠っているという神のお告げを聞いたことから始まった騒動。「燐火」のように欲に眼がくらんだ人々が宝探しに奔走する。その騒動にメドリュスとドゥランも加わる。1958年になってもフランス本国からの生活保証金に頼る人々は依然として「燐火」のような状態である。

9. Une cure de silence (1940 - 1948) 沈黙療法: 第2次世界大戦占領下のリセの教師たちの物語。メドリュスと英語教師ラネックの議論。

10. Baillons (1962 - 1973) 「猿轡」: セント＝ルシア、ドミニカ、ハイチ、ペルー、キューバ、ジャマイカといったカリブ海や南米世界における黒人の現状や歴史が展望される。一方で、自動車レースのギャンブルに溺れ、借金という「猿轡」をはめられたマルティニクの人々の日常生活が語られる。ドゥランは説教師になり、そうした人々の墮落を戒める。

11. Pays (1974) 「クニ」: 小説の時間的到達点。レザルド川は干上がり、スーパーやアーケード街で土地は埋め尽くされていく。「われわれ」はドゥラン、メドリュス、シラシエとともに消えていくだろうと語られる。フランスへの同化主義を賛美する政治家や地元代表のインタヴューのコレクションが挿入される。

12. Terres noires (1944, 1960, 1973) 「黒い土地」: メドリュスが計画したバナナ農場の崩壊の経緯。

13. Le coutelas (1947) 「鉞」: シラシエはある祭りの晩に突然幻覚に襲われ、ナインフォル殺人事件の真相を幻視する。そしてセルビ(サイコロ賭博)のテーブルでレスプリの運転手であるクーリー(インド人)のネガと喧嘩になり、逮捕され独房に入れられる。

これらの物語の時間構成に関しては、1939年という年号が重要なふたつの意味を担っている。ひとつはミラーが指摘するように、「語り手としてのわれわれ」が導入される年であり⁶、もうひとつはドウラン、メドリュス、シラシエという中心的登場人物が小説世界へ参入する年である⁷。ドウラン、メドリュス、シラシエはマルティニクの労働者階級に属する黒人であるが、物語の概観から明らかなように第7章以外のすべての章に必ず彼らのいずれかが関与している。そして小説のなかで彼ら3人は「われわれ」であり⁸、また「われわれ」は彼ら3人の一部である⁹と宣言されているのである。あとで見ると「われわれ」は彼ら以外の登場人物も包括するのであるが、その人物たちの活動は1939年より後である。このように考えると、「われわれ」の物語は、1939年を説話論上の分岐点として小説の到達点である1974年までをその「語りの現在」として設定しているといえるだろう¹⁰。

2. ドウラン、メドリュス、シラシエと「われわれ」

では小説のなかで「われわれ」とはどのような位置づけを与えられているのだろうか。

[...]quand « nous » (non différencié, intact, humilié, chose et âme) s'échappait dans les bois sans peut-être savoir ce qui l'y poussait, et pourtant plus vif, plus chaudement mort et vainqueur qu'il ne le serait jamais, et quand « nous » (un seul, pour tous les autres qui n'avaient pas souri à la nuit et s'étaient acassés dans l'ombre fade du bateau) taillé, tronqué, apprenait à dire je, à penser je, à commencer (continuer?) son infinie agrégation, sa si infime totalité, [...] ¹¹

「われわれ」(未分化で、手つかずで、辱められ、物であり魂である)がおそらく何によって突き動かされたのかもわからぬまま森の中に逃げ込み、しかし逃げ込まなかったらきっとそうならなかったほど澁刺と生き、より熱く誇らかに死に、勝利者になっていったときに、そして切り傷を負い手脚を切断された「われわれ」(夜にむかって微笑みかけたことがなく奴隷船の體えた臭いのする闇に詰め込まれていたその他の者たちにとってはただひとつのわれわれ)が私と言い、私として思考し、その無限の凝集、そのごくちっぽけな全体を開始する(持続する?)ことを学んだとき、[...]

「われわれ」のルーツは逃亡奴隷に求められる。原文で« nous »が単数として扱われていることから明らかなように、モルヌに逃亡した奴隷たちは、初めは原初的、単数的、集団的狀態で迫害を切り抜けながらも輝かしい生活を送り、次第に「私」という自意識を持ち始めた。「われわれ」とはこのようにモルヌという場所^{トボス}にその存在の源とアイデンティティの発達を軌跡を記すものと位置づけられている。一方「われわれ」の相関者であるドウラン、メドリュス、シラシエも、最初は名前がヴィルギユルで区切られずに表記され、「いまだ未分化な存在」として登場する¹²。そして3人は

⁶ Elinor S. Miller, «Narrative Techniques in Edouard Glissant's *Malemort*», in *The French Review*, vol. LIII, n° 2, déc. 1979, pp.224-231. ミラーの指摘によれば、全13章のうち全知の語り手による語りが5つ(1, 7, 8, 12, 13章)、全知の語り手による語りに語り手としての「われわれ」が介入するケースが5つ(2, 3, 4, 5, 11章)、われわれによる語りが2つ(9, 10章)、そして7章だけがシラシエによるモノログであり彼の意識の流れの叙述となる。

⁷ *MM*, p.194の年代表に明記される。

⁸ *MM*, p.25.

⁹ *MM*, p.151.

¹⁰ ボータンの逃亡は1936年頃、オトゥンヌの宝探し騒動は1938年である。これらの事件は1939年以前であるが、ボータンの逃亡は1943年に回想されたエピソード、オトゥンヌの騒動もおそらくは1958年にドウランとメドリュスからシラシエに対して語られたエピソード(p.147を参照)だと考えられる。

¹¹ *MM*, p.25.

¹² *MM*, p.24, « et Dian Médellus Silacier, pour l'instant

小説内で時間の経過とともに次第に分節化され、差異化され、個別の物語を形成する。すなわち3人は「われわれ」の歴史と同じような自己覚醒の道程を辿るものとして提示されている。しかし彼らは逃亡奴隷のトボスに関連づけられ、小説内で逃亡奴隷のディスクール¹³を形成するのだろうか？

mais ils n'écoutaient Dlan Médellus Silacier les branches qui s'étaient étoilées sur le passage du Négateur, — de l'Africain surpris dans sa terre et déporté sur la profondeur de mer et qui dès le premier jour avait refusé de se terrer dans le bas de ravine sous les fougères, — ils ne respiraient autour de lui l'odeur du bateau, la puanteur qui s'était évaporée en fade relent de chair tassée, ils ne voyaient la bête de poudre à l'endroit d'où le chasseur avait voulu s'élancer dans la nuit [la nuit d'avant] pour étripier ce marron primordial¹⁴

しかし彼らドウランメドリュスシラシエは「拒絶者」——生まれた大地で不意に捕らえられ大洋の深みの上を移送され上陸の初日から谷間の羊歯の葉陰に身を隠すことを拒絶していたあのアフリカ人——が通り過ぎる道を覆っていてところどころそこから空がのぞいている木々の枝のざわめきを聞きはしなかった、彼らは彼の周囲に奴隷船の臭いを、あの積み重なった肉体から立ち上る醜えた悪臭のかすかな名残を嗅ぎはしなかった、彼らはこの最初の逃亡奴隷のはらわたをえぐるために追っ手が夜（むかしの夜だ）へと突入しようとするその場所に使役獣の姿を見はしなかった。

ここではいまだ未分節の状態で表記されている3人は、小説舞台に登場する1939年において1788年マルティニクに上陸した「最初の」逃亡奴隷、拒絶者Négateur ロングエの記憶も、新世界に移送された奴隷たちの過去の記憶も失くしているのである。

car ils avaient basculé non pas tant de l'autre côté des années sans suite ni mémoire que sur l'autre versant des choses brûlées labourées, dans la mangle où les chemins s'étaient obscurcis en pagaille d'eau : pour quoi ils s'essayaient maintenant comme gens de bourg à nommer les arbres et les fruits dans l'indistinct amoncellement de vert, eux-mêmes réjouis des erreurs que de toute manière ils n'auraient su éviter,¹⁵

なぜなら彼らは、脈絡もなく記憶もない年月の向こう側というよりも焼かれ耕された事物の向こうの斜面、水浸しになってあらゆる道筋が見失われるマングローブの側についていたからだ。その地帯のために彼らはいまや町の人間のように不分明な緑の堆積のうちにある木々や果実を名づけようと試みていた、そしてどうやっても避けることができなかった誤りを犯してもそれを楽しんでた、

上の引用部分で「脈絡もなく記憶もない年月の向こう側」と「焼かれ耕された事物の向こうの斜面」の対比は、マルティニクの逃亡奴隷の記憶が保存されているモルヌ世

inséparables ».

¹³ グリッサンの第2小説『第四世紀』では、逃亡奴隷の末裔ババ・ロングエが自分の家系を語るが、ババ・ロングエという語り手に端的に体现される逃亡奴隷のディスクールにおいて奴隷制＝プランテーション社会と対比されたモルヌという生活圏において語り継がれた物語＝歴史が浮き彫りにされる。

¹⁴ MM, p.68.

¹⁵ Loc. cit. 本文中の下線は引用者による。訳文中の該当箇所にも下線を施した。以下同様。

界と、プランテーションや道路で開発されつくした平地の近代植民地世界の対比を意味している。ドウラン、メドリユス、シラシエは後者に位置づけられる。さらに彼らは『第四世紀』のマチューのようにモルヌとの交流を通じて自分たちの歴史について深く反省を試みたりすることはない¹⁶。彼らは英雄的存在ではなく平凡な「日銭稼ぎ」djoueurのタイプであり、島内放浪者であり、過去の忘却とともに生きる植民地世界—内存在なのである。彼らは面白半分に「町の人間のように木々や果実を名づけ」ようとするのだが、その2次的な名指し行為は、マルティニクの島の記憶と直結した伝統的な植物の名前という生の重みをもった言葉の忘却を意味している。

Engloutis à l'abrupt de cette casse de cent cinquante années qui avait fêlé entre le premièrement innombrable d'antan et le deuxièmement trop dénombré présent, dans la même bavure de temps où la végétation de légende s'était amincie en savanes rêches, où les mots [et les significations] s'étaient pétrifiés comme d'une absence de quoi que ce soit à dire ou à désigner, où toute volonté de se souvenir de la première nuit et du Négateur s'était comme dessouchée des têtes et des ventres, où le mot mantou et le mot calloge le mot vezou — sans compter tant d'autres qui avaient vécu la vie raide des êtres clandestins menacés secrets — avaient peu à peu terni et disparu.¹⁷

第一に過ぎ去った無数の年月と第二にあまりに数の明確な現在のあいだの割れ目に位置するこの破壊された150年間の急坂を転げ落ち、時の同じひとつの失策のなかに飲み込まれてしまったのだが、そこでは伝説の植生は痩せ細りみすばらしい草地に変わり、語（とその意味作用）は何も言いあらわすものも指し示すものもないかのように石化し、最初の夜と「拒絶者」を思い出そうとするすべての意志は頭もはらわたも抜かれてしまい、マントウ[蟹]、カロージュ[ウサギ檻]、ヴェズ[サトウキビシロップ]といった語は——地下の脅かされた秘密の存在として硬直した生を生きてきたその他多くの語はいうにおよばず——少しずつ輝きを失い消えていったのだ。

近代植民地システムの進展にともなうマルティニク固有の自然景観の変化は人々からことばを剥奪し続ける。さまざまな語は生の記憶という重みを失った空虚な記号に成り果てているのである。アフリカから奴隷として移送され、アフリカのことばをいったん失ったあとマルティニクの地でふたたび築きあげた自分たちが生きる世界の分節のしるしであるさまざまな語が、またしても失われていくのである。この二重の忘却のなかで生き延びてきたドウラン、メドリユス、シラシエないし「われわれ」は、第2次大戦に巻き込まれようとする1939年の時点、すなわち物語の現在の起点において、自分たちの状況を語ることばを失っている。

Se retrouvant en foule près de la mer Dlan Médellus Silacier mêlés à combien d'autres qui avec eux avaient franchi la casse sans ordre ni mémoire là dérivant en eux-mêmes, béants de n'avoir mot pour expliquer cette affaire : *la terre en guerre le monde en flammes déclaration mobilisation*,¹⁸

¹⁶ ただし、シラシエのなかにはパパ・ロングエの記憶が維持されている。これについては本論5章を参照。

¹⁷ MM, p. 69. 訳文中の[]内は訳者による補遺である。以下同様。

¹⁸ MM, p. 70.

海の近くでドウラン・メドリュス・シラシエは、秩序も記憶もない破壊を彼らとともに乗り越えた多くの他の人々の間にまじっていた
そこで彼らは戦争状態になった土地、炎と化した世界、宣戦布告、暴動といった事態を説明するための語を持たずに呆然として漂っていた

モルヌに保存された逃亡奴隷の歴史の忘却、マルティニクでの生と等価である自然を名指す語の忘却、そして社会の現状を把握する語の不在。そのような状況に置かれた人々は、「ランゲージュの不在」に結びつく叫びを発することの困難さ¹⁹のなかにある。この「ランゲージュの不在」こそが『マルモール』が問題とする民衆のリアリティに他ならない。ドウラン、メドリュス、シラシエすなわち「われわれ」は過去の忘却のなかで不毛な記号と化した語の残骸に囲まれ、現在を認識するランゲージュを形成できない状況において彼らの物語を開始したのだ。では生きのびるために果敢に行動する彼らの物語はいかなる軌跡を辿ったのか？

ドウランは神秘的傾向を持っている。1940年に最初の棺担ぎの仕事に加わり、1941年には暴れるコレントロックの豚を鎮めるという不思議な能力を発揮し、コレントロックの息子セレストンに対して豚が暴れるときは空から星が降りてきて豚に宿っているのだと語るドウラン²⁰は、1973年には辻説教師になっており、現実世界から遊離して神による救いを説く。メドリュスは1944年にバナナ農園を開設して共産主義的ユートピア社会の建設を目指す。しかしフランス本国からの社会保障金に頼り本国への移住に気を奪われた人々の意欲は上がらず、1973年には本国の観光開発会社SOMIVAGによって土地を徴収されて農園は失敗に終わる。シラシエは政治的関心が強く1939年に軍に入隊。終戦直後1945年から46年にかけて市長選に際してマチューら急進派ではなく現状維持派のレスブリ支持を表明。1947年にクーリーと喧嘩して投獄され、その後は小説内でははっきりした行動は描かれない。

このような3人の物語の軌跡を概観的に捉えた場合、それぞれが固有のディスクール、すなわちドウランはキリスト教的神秘主義、メドリュスはいわばフーリエ的な理想共同体主義、シラシエは植民地肯定的権力主義的なディスクールを体現しているといえる。これらの宗教、経済、政治といった領域で示されるマルティニクの症例的ディスクールはみなフランスないしヨーロッパの枠組みを越えていない。彼らの物語の軌跡は、フランス本国によって抑圧される「われわれ」の社会的現実を暴露するだけでなく、「われわれ」が拠って立つディスクールの他者性を露呈させているといえるだろう。

ここまでドウラン、メドリュス、シラシエと「われわれ」の相関を見てきたが、「われわれ」とはその3人によってのみ代表されるものではない。「われわれ」はレスブリ氏であり、リセの教師ケベック氏であり、北部の山間部に住む農夫コレントロック氏であり、コレントロックの豚(!)であり、その他諸々の有名無名の人々を包括し、さらにマチューを含むと小説内で宣言されている²¹。しかし『マルモール』において展開されている「われわれ」の物語は、以上のドウラン、メドリュス、シラシエの物語の分析から窺えるように、前2作におけるマチューの物語とは明らかに異なった軌跡

¹⁹ MM, p.69 - 70, « la difficulté elle-même d'avoir à articuler [...] quelque cri que ce fût qui pût réellement se bouer en forme de langage ».

²⁰ MM, p.35.

²¹ MM, p.25 - 26.

を示している。次章では、「われわれ」の指示対象レスプリの物語のうちに際立って示される反マチュー的描線に焦点をあててみたい。

3. レスプリと「われわれ」

第5章「投票箱」において、市長秘書のレスプリはトロワ・リヴィエールの歴代市長選挙にまつわるさまざまな不正工作を語る。次期市長選への出馬を狙う彼は島の現実を知り抜いている。われわれはいつもフランス本国の権力からの承認を求めており自己を内部から理解しようとはしない、とレスプリは語る²²。彼はアジア系アフリカ人を差別する²³フランス同化主義者である²⁴。レスプリの話を酒場の片隅で聞いていたシラシエはその不正と腐敗に憤るが、最終的にレスプリの現実主義を支持する。ここで注目すべきは、シラシエはより急進的な候補を当選させるためにさまざまな画策をめぐらすマチューやタエル²⁵を知っており、レスプリ陣営とマチュー陣営を天秤にかけ後者を批判しているという点である。シラシエはマチューの理想主義を嘲笑うかのように「何も変わらない、何も変わらないのさ」とつぶやき²⁶、第6章「7分半」では車を疾走させながらタエルの行動を批判する²⁷。

このようにレスプリやシラシエに寄り添う「われわれ」は、『レザルド川』と『第四世紀』の主人公たちと対立する植民地世界の現状維持派側に立っているのである。さらに問題になるのは、そうした「われわれ」の物語には前2作で展開された弁証法的緊張が不在であるという点である。『レザルド川』では、逃亡奴隷たちの本拠地であるモルヌに住むタエルやババ・ロングエによって体現される「コント」（口頭で伝承される物語）の世界と、町というプランテーション＝植民地空間に住むマチューに体現される西欧的論理的「歴史」の世界とが対比され、両方のディスクールを代表するタエルとマチューの協働が描かれ、その経緯を語る「私」が両者を融合し止揚する物語を紡ぐように要請を受けている、という構図を示していた²⁸。『第四世紀』では、第2次大戦中に語り手ババ・ロングエとマチューによって追求された歴史語りにおける対立が第3の語り手ミセアの登場によって新しいディスクールに止揚されるという構造を示していた²⁹。ところが『マルモール』における「われわれ」の物語にはそうした緊張した弁証法のと立項が現われないのである。その状況は、レスプリ陣営によるナインフォル暗殺の物語を通して炙り出される。

この物語はまとまったテキストとして提示されておらず、作品の随所に断片的に散りばめられ、最後の第13章「鉈」においてシラシエの幻視によって謎解きが果たされる。その隠蔽された物語はさまざまなエピソードが交錯する『マルモール』を通奏低音のように持続的に貫き、作品にポリフォニックな厚みを与えている。事件の真相は次のようなものである：レスプリは対立候補であるナインフォル暗殺を会計士オディベールに依頼し、オディベールはナインフォルをピストルで密かに射殺する。しかしその光景をボータンに目撃されたオディベールはボータンをも狙撃するが失敗し、船で海上に逃亡し行方不明になる。一方ボータンも島内に逃亡潜伏するが、偶然憲兵に射殺される。レスプリはボータンにナインフォル殺しの濡れ衣を着せる。そして終戦直後の市長選に立候補を図るが事故死する。

²² MM, p.87, « Nous n'entendons pas nous estimer du dedans. Où serait l'intérêt? Nous désirons la reconnaissance d'en haut et l'exigeons chacun pour soi. »

²³ MM, p.82.

²⁴ MM, p.87.

²⁵ フランス本国から送られた工作員がラン殺しを計画する彼らの急進的政治行動は『レザルド川』に詳しく描かれている。

²⁶ MM, p.96.

²⁷ MM, p.109.

²⁸ 工藤 晋「エドゥアール・グリッサン『レザルド川』読解、語る主体の刻印とディスクールの弁証法」、『言語態』、第4号、2003年、217 - 247ページを参照。

²⁹ 工藤 晋「エドゥアール・グリッサン『第四世紀』読解、語り手たちの弁証法」、『レゾナンス』、第3号、2004年、47ページを参照。

注目したいのはボタンとオディベールの位置である。主人のベケを殺そうとして逃亡したボタンは現代の「逃亡奴隷」である³⁰。しかし彼自身も肉屋を殺害し、プランテーション経営者と同調し人々に暴力を振るう³¹。一方逃亡するオディベールも体制からの「逃亡奴隷」といえるが、民衆の自由と改革を叫ぶ対立候補ナインフォルを殺害し、ゾンビのような存在と化している³²。彼らはかつてのロングエの威光を失った逃亡奴隷の末裔なのである。ジャマイカの逃亡奴隷コミュニティがやがて新たに逃げてくる逃亡者を権力側に売り渡すようになったように、マルティニクでも逃亡奴隷という反抗のトボスは消失し³³、彼らは「裏切り者」になったのである。逃亡奴隷の末裔が辿る道筋は今やかつて『レザルド川』でタエルによって殺害された裏切り者ガランと同じものである³⁴。

このように炙り出される逃亡奴隷消滅の物語は、モルヌ対植民地世界といったこれまでのグリッサンの小説にみられた基本的対立構図の破産を示している。「われわれ」の物語は体制への反抗とアイデンティティを確認する可能性の契機、止揚の契機としての逃亡奴隷のトボスを失う。メドリュスとシラシエはボタンを探索しにでかけるがもはや逃亡奴隷に会うことはできない。「われわれ」は墮落したボタンの象徴である塩田³⁵に象徴される、のつべらぼうの植民地空間のなかに漂流するしかなく³⁶、第2次大戦後、海外県化が進むなかで本国から支給される生活保障金にすがりつき、本国移住を夢み、自動車レースのギャンブルに溺れる日々の暮らしへとたどり着く。『第四世紀』の結尾においてマチューは終戦直後ボザンボとシャルルカンという2人の会話に耳を傾け、そこにパパ・ロングエの後を継ぐ生き生きした民衆のディスクールの生命力の息吹を感じたが、『マルモール』における後日談ではシャルルカンはボザンボを車でひき殺してしまう³⁷。『レザルド川』でマチューやタエルの行動に共感していた警官のティガンバは、『マルモール』では1959年のクリスマス暴動に際して反抗する民衆に発砲する³⁸。裏切りと自己空洞化に覆われた「われわれ」の物語からは、前2作で描かれた弁証法的な止揚の発動とその躍動を窺うことはできない。そこには、弁証法の破綻によって力動的に新しいディスクールを生み出そうとする力を喪失した「われわれ」の自己形成の失敗、植民地＝海外県空間における死が浮き彫りにされているのである。

では、『マルモール』とは植民地＝海外県空間における「われわれ」のディスクール形成の不可能性という最後通告の申し渡しであると結論すべきなのだろうか？ 性急な結論づけの前に、「われわれ」が包括するもうひとつのグループ、リセの教師たちの物語を辿ってみたい。そして、それをひとつの起点として「われわれ」に提示される可能性について考察したい。

4. リセの教師たちと「われわれ」

第9章「沈黙療法」で描かれる占領期のリセの教師たちは、正確なフランス語や英語の習得を至上命題とし、ギリシャから19世紀に至る西欧文化の模倣に血眼になる。「装飾過剰の言葉を操る普遍的な知の中毒者であり、片時もその気取った言葉を

³⁰ MM, p.44.

³¹ MM, p.57.

³² MM, p.196.

³³ MM, p.186-187.

³⁴ MM, p.63.

³⁵ MM, p.44.

³⁶ MM, p.63, « Tous confondu au plat pays où s'achevait la trace, ».

「すべてのものが、足跡がそこで終わる平べったいクニで交じり合っていた」。p.64, « des espaces béants où épuiser les trois vies de la terre, de la mer et de ce qu'on ne pouvait que nommer (la mort en île bourrée de leurs d'antan) le dépassement. 「土地、海、超越（過去の輝きに満ちた島における死のかたち）としかなづけられぬもの、これら3つの生が枯れ果ててぼんやりと口を開いた空間」。

³⁷ MM, p.207.

³⁸ MM, p.129.

疑われない」³⁹ 彼らの振る舞いには滑稽なボヴァリスムが露出している⁴⁰。しかし彼らは次第に自らのうちに潜む他者の欲望を自覚していく。自分たちがヨーロッパの一員ではなくそこに自分の場所を持っていないことに気づく彼らは沈黙し⁴¹、高速道路を虚しく車で疾走する。「沈黙療法」というタイトルはそうした状況に対する皮肉である。

しかし、教師たちの言葉に耳を傾けるおそらくリセの生徒をも含むであろう「われわれ」にとって、そうしたリセの教師たちは排斥すべき他者ではない。「われわれ」は彼らのランゲージュを批判しつつも、次のように共感と評価を表明する。

Les élus de ce temps. Nous les aimons, peut-être pour cela même qu'ils s'éprouvaient si supérieurement éloignés de Dlan Médellus Silacier. Si proches pourtant. Si étrangers aux lamentables d'à présent, leurs descendants vidés de sang. Eux, les monstrueux composants, les victimes sans exception.⁴²

この時代に選ばれた人々[リセの教師たち]。われわれは彼らを愛する、彼らが自分たちはドゥランメドリュスシラシエからはるかにかけ離れて優れていると思っていたまぎにそのことによって。ところが[彼らは3人に]とても近いのだ。そして現在の惨めな人々、血が枯れ果てた彼らの子孫とはまったく異なっていたのだ。彼らは並外れた構成要素であり、例外なく犠牲者なのだ。

リセの教師たちは西欧の「犠牲者」である点においてドゥラン、メドリュス、シラシエと遠くはない。つまり「われわれ」にとって彼らは他者ではない。それどころかりセの教師たちを回顧する現在の「われわれ」は「血が枯れ果てた彼らの子孫」とであると規定される。では彼らの言動はどういった点で評価されるのだろうか。それは第一に、占領下にあつて、彼らは他者のことばによっているとはいえ、「世界に対する熱狂」⁴³を示し、島の現状について何かを言いあらわそうとする情熱を示していた点である。それに対して大戦後、海外県化が進んだなかで「われわれ」には何も語ることでできない空虚なことばしか残らなかった。

Nous les aimons, [...] comme s'ils avaient cherché, de cet excès de style à ces extrêmes de silence, la tresse de quelque chose que nous eussions pu nommer : mais nous ne pouvons rien nommer, nous avons été sans nous en apercevoir usés en nous-mêmes, réduits non pas tant à un silence qu'à cette absence défilée qui est la nôtre et où les caricatures de parler aussi bien que les mutités elles-mêmes ne signifient plus rien.⁴⁴

われわれは彼らを愛す、[...] なぜなら彼らはその過剰な文体や極端な沈黙を駆使して、われわれが名づけられたかも知れない何かを編み上げようとしていたかのようだったからだ。一方われわれは何も名づけることができない、知らず知らずのうちにわれわれは擦り切れてしまい、沈黙へというよりもわれわれ

³⁹ MM, p.162, « Les tarabiscotés. Les intoxiqués du savoir universel. [...] Eux qui pas un instant n'ont douté de leur phrase. »

⁴⁰ MM, p.155.

⁴¹ MM, p.170.

⁴² MM, p.157.

⁴³ MM, p.163.

⁴⁴ MM, p.153.

自身であるこの延々と続く空虚へと追い込まれてしまったのだ、そこでは喋ることの力加減あるいは言語障害の症状があふれそれらはもはや何も指し示すことはない。

第二に、教師たちによって語られる戦況や世界情勢が、それを聞く「われわれ」のなかに共通の話題を与え、「われわれ」に覚醒したコミュニケーション空間を成立させたという点である。リセという空間には、サトウキビ畑での労働に疲れた黒人たちが一日の終わりの通夜に小屋に集まって繰り広げ参加する誰もが語る主体となる「コント」の語りのようなパフォーマンス性にあふれた物語行為が立ち上がり、しかもそこには「真理への欲望」がみなぎっていた。

dont l'important n'était pas d'en rapporter les données littérales, connues de chacun, mais de retrouver, refaisant le conte de tant d'histoires folles [...], la nuance, le demi-soupir, le roulement de voix ou le rythme de silence qui soulignaient en tout cas pour nous, et alors même que nous ne le savions pas encore, non pas tant la folie ou la sottise que l'appétit de vérité que tant de folies ou de sottises prédisaient.

Histoires dont l'important était donc de les rapporter, de les reporter, histoires qu'on nous avait pour la plupart contées mais dont pourtant nous avions tous la certitude que nous les avions personnellement et en totalité vécues :⁴⁵

⁴⁵ MM, p.164 - 165.

[われわれにとって] そこで重要なことは、みんながすでによく知っているありのままの事件を報告するのではなく、常軌を逸した事件にあふれたコントの語りを再現し [...] そこにいずれにせよわれわれにとって強調のしるしであるニュアンスやちょっとした休符や繰り出される声の調子や沈黙のリズムを見出すことであり、そこにあらわれるのは、われわれはまだはっきり自覚していなかったが、狂気や愚かさというより、狂気や愚かさが予告している真理への欲望だったのだ。

数々の物語において重要なことはしたがって、それらを報道すると同時に転記することであった、物語の大部分はすでにわれわれに語られていたけれど、[その報道と転記の行為において]われわれはみなそれらの物語を個人的に所有しその物語全体を生きたという確信を持ったのだ。

そこには、確かに希望への兆しが認められたのだ。「われわれ」は現在の空虚なランゲージュを乗り越えるために、リセの教師たちのランゲージュを引き継いで、そこから「われわれの言語表現」を組織すべきだったのだ。リセの教師たちのランゲージュは「われわれ」の可能性のトポスとして提示されているのである。

Et il nous semble que pour avoir permission de nous assembler avec eux, [...] il nous eût fallu d'abord mériter [...] par nos actions ou nos façons, de continuer à crier ce qu'ils ont, par manie et splendide nullité, par dérision du dire et mort de l'âme, commencé précisément de balbutier,⁴⁶

⁴⁶ MM, p.162.

そして彼らと団結するためには、[...] われわれはわれわれ自身の身振りとやり方で、彼らが錯乱や華麗な無意味さや嘲笑的な言い方や狂気を通じてまさにどもりながら言い始めたことを叫び続けることが何よりもまず必要であったのだらうと思われる、

ils saisissent à grands coups le cordelet de velours ou de soie sauvage : et il nous revient, à nous les difficiles descendants de ces superbes victimes, à nous qui avons connaissance mais dont la racine a tari, d'organiser à ras le vent cette écume d'où notre langage poindra⁴⁷

⁴⁷ MM, p.161.

彼らはピロードと野蛮系の組み合わせを鷲掴みにつかんでいる、そしてその組み合わせはわれわれに戻ってくる、こうした至高の犠牲者たちの困難な後継者たちであるわれわれに、根は干乾びてしまったがわれわれのランゲージュ言語表現がそこから生まれてくるあわ立ちを風のなかに組織することを知っているわれわれのところに

ところで「われわれのランゲージュ」とはリセの教師たちのランゲージュの反復ではない。それはフランス語という支配言語に縛られた彼らのランゲージュを出発点としてそれを裏切る「来るべき恩知らずのランゲージュ」であり、その抵抗のランゲージュをドウラン、メドリユス、シラシエとともに模索することが要請されるのである。

nous suspendons le mot

nous nous embusquons, énigmes de notre supposée histoire, monstres d'une mythologie dont nous n'approchons jamais le secret, effigies et mutités aux fenêtres de notre avenir, enrubbannés non pas tant de magnolia que de toutes les frivolités qui nous enchantent, nous offusquent : nous, pâlis et dérivés, châtrés de toute somptuosité mais épurés aussi de ces excès de perdition par où une volonté de résistance se révèle à elle-même ; ternes qui n'ont plus à accepter, pour ce que le choix n'est plus permis.

Peut-être (quand il s'agit de crier une telle mort) renoncer à la fulguration et à l'extase de cette langue? Peut-être avec Dian Médellus Silacier fouiller l'ingrat langage à venir?⁴⁸

⁴⁸ MM, p.161 - 162.

われわれは語を宙吊りにする。われわれは身を潜めている、われわれの偽の歴史のさまざまな謎、われわれが決してその奥義に到達できない或る神話の化け物たち、われわれの未来の窓辺に飾られるさまざまなうわべだけの似顔絵と言語障害の症状のなかに。われわれはマグノリアではなくわれわれを魅了しわれわれの気分を悪くするあらゆるくだらないアクセサリーを身にまとっている。われわれは、色あせ、漂流し、あらゆる贅沢によって去勢されているが、しかしまたこのような墮落の過剰さから浄化され、抵抗の意志がひ

とりでにわきあがってくる；生気のないわれわれ、もう決して受け入れては
いけない、選択の余地はもうないのだ。

おそらく（このような死を叫ぶことが問題となるとき）この言語の閃光と
陶酔を放棄することなのだろうか？ おそらくドゥランメドリュスシラシエ
とともに来るべき恩知らずのランゲージュを探ることなのだろうか？

「恩知らずのランゲージュ」は特にメドリュスにおいて顕著に体现される。その具
体的様相は同化主義者であるリセの英語教師ラネックとメドリュスの次のような対比
のうちに描かれている。

Chez Médellus le cassement de la prestigieuse universalité de cette langue,
l'entassement des mots dans l'étroite syntaxe qui les brisait, la difficile respiration
où il cherchait son souffle ; chez monsieur Lannec le vertige de la transcendance, le ciel
infini dans la bouche, l'ivresse de perfection dans la phrase balancée à bout de lèvres
comme un lasso, il parle français aussi bien qu'un Blanc.⁴⁹

⁴⁹ MM, p.157.

メドリュスの話しぶりには、この言語の輝かしい普遍性の粉碎、凝縮されたシ
ンタクスのなかに押し込められ粉々にされたさまざまな単語の堆積、どこで
息をつけばいいのかわからない区切りの難しさが示された。一方ラネックの話
しぶりには、卓越性の眩暈、口のなかに広がる無限の宇宙、唇の端から投げ縄
のように繰り出される均整のとれた文の完璧さの陶酔が見られた。彼は白人と
まったく同じようにフランス語を喋るのだ。

メドリュスの話しぶりとはクレオール語のリズムがフランス語のなかに生き生きと流
れ込む姿に他ならない。こうした「恩知らずのランゲージュ」の実践において、「われ
われ」はリセの教師たちの懐から巣立ち、積極的な主体化の身振りをみせ、抵抗の手
段を獲得する。メドリュスは第12章においてそうしたランゲージュによって自分の農
園計画の経緯を語る。クレオール語の歌までも散りばめながら「迂回する言葉で」⁵⁰
語る彼のランゲージュは、読者にその難解な意味を翻訳する全知の語り手による整理
されたフランス語のランゲージュとの差異を際立たせながら、「あなた」tu という聞
き手に語りかける。農園の停滞、崩壊とともにメドリュスのランゲージュは次第に錯
乱し、語り手の敷衍とかけ離れ、最後には周囲から狂人とみなされる。しかしそこ
には語る主体の抵抗の軌跡が刻まれているのである。

⁵⁰ MM, p.214, « par des mots dé
tournés ».

リセの教師たちを起点として生成する「われわれ」の主体化への可能性、フラン
ス語の内部に立ち上がる固有の言語表現による抵抗。こうした抵抗は、グリッサンが
その小説言語において一貫して実践する「多言語主義」という戦略それ自体に直結し
ている。そこで問題になるのはラングではなくランゲージュの複数性である⁵¹。そし
てメドリュスの挫折にもかかわらず、語る主体としての民衆の抵抗の生成は、『マル
モール』においてひとつのはっきりとした物語の描線を形成している。次章でその点
について考察したい。

⁵¹ この点については « Langue,
multilinguisme », *Le Discours
antillais* [1981], Gallimard
« Folio », 1997, p.542 - 555 を参
照。その論考をグリッサンは
「私はあなたにあなたの言語で

5. 語る主体としての抵抗

『マルモール』における「われわれ」の物語には、さまざまな抵抗が断片的に書き込まれている。それらの潜在的抵抗は勝利や成功に導かれることはないが、決して無視されるべきものではない。例えばドウランの説教に反応して海外県の豊かさの象徴である衣服を脱ぎながら本国依存を批判する狂人のディスクールである⁵²。また、小説の最終章におけるシラシエは、本論第2章で分析したような体制追従的立場から逸脱しそれを批判しようとする振る舞いを見せる。彼の幻視によるレスプリの暗殺計画の暴露には、植民地の現状維持的な動きへの批判が込められている。ラーガン・レテルとの議論のなかでパパ・ロングエを擁護するシラシエ⁵³のことばからは、かろうじてそこにモルヌの記憶が維持されていることが明らかになる。そして彼が独房のなかで鉋を研ぐ印象的なラスト・シーンは、「われわれ」の抵抗の意志を象徴的に表明しているといえるだろう。

しかし『マルモール』における抵抗の核心部は、小説の中心部に置かれた第7章「倒れ、立ち上がり」という圧倒的なテキストである。1788年から1974年という年代は、『レザルド川』、『第四世紀』、『マルモール』に語られたマルティニク島の物語のタイム・スパン全体を覆う。改行がなく句読点もほとんどない20ページにわたるテキスト全体は、「ils se levèrent....」というリフレインによって8つの部分に分けられる。それらすべてには無名の3人の主人公が登場し、そのうち7つは権力側によって射殺されて終わり、事件を目撃する子供がその傍らに存在するという同一構造を反復する。各エピソードは次のような内容をもつ。

1) 1788年頃、逃亡奴隷の3人を匿った奴隷夫婦の小屋が焼かれる。2) 1848年の奴隷解放宣言当時、主人の屋敷に押し入る黒人たちの一団に参加する3人が民兵に射殺される。3) 奴隷解放の10年後、未だに奴隷的労働に甘んじている各地のアピタシオンを訪れ自由労働と報酬の権利を説く3人が民兵に射殺される。4) 第2次大戦終了直後、独立への機運が高まった頃であろうか、ベケヤムラートに対して黒人がイニシアチブを取り女性たちの地位を向上させなければならないと考える3人が当局側の銃弾に倒れる。5) サトウキビ農業労働者のストライキで3人は憲兵の発砲により命を落とす。6) 1959年のクリスマス暴動の頃⁵⁴。ラム酒蒸留工場の閉鎖や大型店舗の導入、消費社会の進展によって島の景観が変わる。民衆と警察側が対立し、3人はかつて民衆側に共感を寄せていた警官ティガンバによって射殺される。7) 70年代であろう。観光開発のために土地は無残に切り刻まれていく。バナナ農園の労働者に明るい表情はみられない。パイナップル農園でのストライキに合流した3人はCRS(機動隊)のヘリコプターからの銃撃に倒れる。8) 「彼らはパイナップルの葉で傷だらけになって立ち上がり歩き出した」という1行ほどの文で閉じられる。

同一構造の反復は強力なプロテストの効果を生み出す。しかしこの叙事詩は単なる黒人の受難のタブローではない。物語の終着点である70年代の状況を語る7番目のエピソードにおいて繰り返し強調されている「変化」を見落としてはならない。

il y avait quelque chose de changé depuis les tas d'années que les nègres pour

話す。そして私はあなたを私の言語表現で理解する」

« Je te parle dans ta langue, et c'est dans mon langage que je te comprends. » と締め括る。尚、同書からの引用にあたっては以下DAと略記する。

⁵² MM, p.191 - 192.

⁵³ MM, p.224.

⁵⁴ 1959年12月20日の夜フォール・ド・フランス付近でフランス本国人の運転する自動車とマルティニク人のスクーターが接触事故を起こした。両者は口論となりその周りを群集が取り巻くが、そこに機動隊が強圧的に介入した。それをきっかけに、フランスの海外県政策について不満を積もらせていた民衆の怒りが爆発し数日間にわたってフォール・ド・フランスは暴動状態となった。Armand Nicolas, *Histoire de la Martinique*, Tome 3,

un oui ou non se faisaient fusiller sans écho ni souvenir ils pensèrent sans même qu'un nom soit posé sur la terre qu'on foule où on court ils pensèrent sans même qu'on arrête de les traîner par appels criés de radio de télé de journal vers le triste oubli du triste carnaval manipulé comme une boîte de dérivation ils pensèrent voilà on peut commencer à compter à tenir la liste à dérouler le temps comme une feuille de canne tout au long de la canne avec à chaque noeud le portrait de ceux qui sont tombés leur force leur nom caché qui seront notre marque dans le temps et tout en bas la souche que tu découvres pour la dérachiner d'un coup d'un seul coup l'enfoncer la planter dans le jour qui vient⁵⁵

L'Harmattan, 1998, p.180 - 186 を参照。

⁵⁵ MM, p.131.

ささいなことで黒人が銃殺されても何の反響も起らずそれが記憶にとどめられることもない年月の流れの後に何かが変わった、人が踏みしめ走る土地にひとつの名前も刻まれないことがないとしても彼ら「無名の3人」は考えた、ラジオやテレビや新聞などの叫びによって水流管理装置のように巧みに仕組まれた悲しいカーニヴァルの悲しい忘却へといつも流されながらも彼らは考えた、彼らは考えた、そうだ、サトウキビの茎の節ごとに生える葉のような時間を、倒れた人々の肖像を、彼らの隠された力と名前を、数え上げ整理し語り始めることができるのだと、それらのものは時の流れのなかでわれわれの標石となり、とりわけ、いつの日かあなたが一気に引き抜いたり植え込んだり植え直したりする根株となるだろうということ。

ここには過去を自覚する民衆の姿が描かれている。1788年から反復的に殺戮され続け、それでも立ち上がり続けた「無名の3人」は、自らの歴史を語る主体としての可能性に気づいたのだ。そして、最後のリフレインで立ち上がった彼らはその物語行為という抵抗を未来へ向けて開くだろう。この無名の3人はドウラン、メドリュス、シラシエを想起させ、「われわれ」へと木霊する。語る主体を複数の人々へ常に開いていくこのような語りのテクニックは、物語の主体が無名性を帯びたマルチニクの民衆であることを強く訴える効果を挙げているといえるだろう。『マルモール』の中心部に置かれたこの壮大な叙事詩は、小説内に散らばる物語を束ね、抑圧に屈することなく未来へと自らの物語を語り継ごうとする民衆の「語る主体」としての覚醒を提示しないし要請しているのである。では、その物語はどのようなディスコースの地平を開くのだろうか？

6. 結論：「関係性」の物語へ向けて

1960年にレザルド川が干上がるという象徴的な事件⁵⁶を経て、本国企業による観光開発によって島の伝統的な景観が失われていく70年代の現在を、「われわれ」は例えば次のように集約的に認識する。

⁵⁶ MM, p.194.

Nous n'avons que cette manière de venir au monde : par le dessèchement qui pourrait.

C'est notre relation ; n'est-il pas vrai que partout au monde la terre est ainsi menacée, l'eau si complètement tarie : de sorte que par là au moins nous partageons quelque chose avec l'univers.⁵⁷

⁵⁷ MM, p.189.

われわれは世界に登場するためにこうしたやり方しかもっていない、それはつまり腐っていく乾燥である。これがわれわれの関係なのだ、しかし事実として世界のいたるところで土地はこのように脅かされ、水は完全に干上がっているのではないだろうか。つまりその点において少なくともわれわれは全世界とあることがらを共有するのだ。

これは「われわれ」の現実を語る物語の到達点である。そこには、観光開発によって世界化する島、環境破壊という代償と引き換えに世界といわば負の「関係」を結ばざるを得ない「われわれ」の現在に対する悲痛で冷静な認識がある。そして「われわれ」の物語は、海外県という虚無のなかに消滅するようにみえる。その極点が、フランス同化主義を讃えるテレビ・インタヴューのコラージュである⁵⁸。本論第2章、第3章でみたように、「われわれ」のルーツはモルヌであったが、そのトボスの消失によってモルヌとプランテーション世界の弁証法は消滅し、「われわれ」は同化主義のディスクールのなかに埋もれていく。

⁵⁸ MM, p.198 - 199.

しかし物語の到達点は終着点ではない。デブリユは、「ランゲージュの喪失を感じることは、まだ日の目を見ぬ新しい来るべきランゲージュが成熟する条件である」⁵⁹と指摘するが、この到達点は新しい認識の地平を導く兆しを宿している。上の引用において、開発による環境破壊というマルティニクの現状は「世界のいたるところで見られる現象として認識されている。つまりマルティニク島は現在、世界各地で進行する問題を共有する場所へ立ち至ったのである。かつて大戦中にメドリユスとラネックは次のように議論していた。

⁵⁹ Jean-Yves Debreuille, « Le langage désancré de Malemort », Yves-Alain Favre et Antonio Ferreira de Brito, (sous la direction de) *Horizons d'Edouard Glissant, actes du colloque international*, Octobre 1990, J&D éditions, 1992, p.327.

— Mais nous serons bientôt des citoyens oui mon ami assimilés, nous seuls parmi tous ceux qui veulent d'Orient ou d'Afrique

— Mais tu me dis quelle qualité de mots que le malheureux ne peut pas oui monsieur car nous serons bientôt des mitoyens de quoi il y a la mer⁶⁰

⁶⁰ MM, p.168.

「しかしわれわれはもうすぐ市民に、同化した輩になるのだよ、そうしたいと思っている東洋やアフリカを含めたすべての人間の中で、われわれだけが。」

「なんてことをおっしゃるのでしょうかね、不幸な者にはそんなことはできない、そうですよ、だってわれわれはもうじき列島民になるのですから。」

自分たちを「フランス市民」と規定しようとするラネックに対してカリブ海のなかの一員として認識しようとするメドリユスの反発は、「アンティル」というトボスへの意識の萌芽を示している。しかし、皮肉にも70年代の現在において「われわれ」はメドリユスの主張のように主体的にカリブ海との連帯を果たしたのではなく、ラ

ネックの主張する同化主義の結果生じた問題において世界と通ずるようになったのだ。また、周囲のカリブ海世界を展望する「われわれ」は、そこに黒人がおかれている共通の状況と問題点を認識するようになる⁶¹。すなわち、「われわれ」はその物語の負の到達点において世界と共振する地平を見出したのだ。無論それは現状を肯定することを意味しない。グリッサン自身が指摘するように、『マルモール』は完成した植民地主義におけるマルティニクの集団的疲弊を告発する意図をもって書かれた⁶²ことは間違いない。しかし、その告発は決して「われわれ」を犠牲者として特権化あるいは正当化を図る「悲劇」のディスクール構築でもないと思われる。

グリッサンは1978年にフォール・ド・フランスの文学研究センターで発表した「歴史と文学」という論文の結尾において、新しい文学のあり方について提言している。マルティニク人にとって根本的な問いは「私とは誰か？」ではなく「われわれとは誰か？」である。新しい文学的ディスクールは、常に正当性を問題とする「悲劇」的ディスクールを拒否し、価値のヒエラルキーの呪縛から逃れた「関係性」のうちに「われわれ」をとらえる地平を拓くべきだと次のように述べる。

C'est que toute Tragédie, au sens occidental, est discriminatoire. Elle recompose la légitimité de la filiation, elle ne donne pas l'épars infini de la Relation. [...] Nos contes peut-être sont aussi l'anti-Tragique : la disruption de l'histoire et le rejet de toute légitimité transcendantale. L'histoire et la littérature, désencombrées de leurs majuscules et contées dans nos gestes, se rencontrent à nouveau pour proposer [...] le roman de l'implication du Je au Nous, du Je à l'Autre, du Nous au Nous. La Relation dessine en connaissance le cadre de ce nouvel épisode. On me dit que le roman du Nous est impossible à faire, qu'il y faudra toujours l'incarnation des devenir particuliers. C'est un beau risque à courir.⁶³

というのは西欧的な意味であらゆる「悲劇」は差別的だからです。それは血筋の正当性を再構成し、「関係性」の無限の拡散をもたらしてはくれません。[...] おそらくわれわれのコントもまた「反-悲劇」です。なぜならコントは歴史を断絶させあらゆる超越の正当性を拒否するからです。歴史と文学は、その大文字性を取り除かれ、われわれの身振りで語られるとき、新しい出会いへと導かれ、「私」から「われわれ」へ、「私」から「他者」へ、「われわれ」から「われわれ」へと架橋する小説を提示するでしょう。「関係性」が認識においてその新しい段階の枠組みを描くのです。「われわれ」を主体とする小説を書くことは不可能であろうとされています。小説とは常に個別적인ことがらを生成し受肉しなければならないのですから。しかしそれは挑戦する価値のある冒険なのです。

個別적인登場人物を英雄的に特権化させることなく常に「われわれ」という主体へ関連づけ、無名の人々の声を響かせ⁶⁴、完成した植民地主義の暗澹たる現状認識のなかで「クニをその真の物語において語る」⁶⁵ことを目指しつつも「悲劇」に仕立てず、「われわれ」を成立させている他者との「関係性」に眼差しを向ける『マルモール』

⁶¹ 第10章「狼轡」。

⁶² DA, p.19 - 20.

⁶³ DA, p.266 - 267.

⁶⁴ その顕著な例が第8章「熾火たち」にあらわれている。そこでは、宝騒動をうわさする人々のセリフが断片的にページのな

ル』は、こうしたグリッサンの詩学的意図を鮮明に反映した創作実践といえるだろう。マルティニク島内部の弁証法的な2項関係から世界のなかの多項関係のネットワークへ。『マルモール』が提示する物語の地平にはそうしたパラダイム・チェンジが刻印されているように思われるのである。

かに散りばめられている。MM,

p.146 - 147.

⁶⁵ DA, p.20.